『解深密経』における大乗のヨーガ

淺　野　秀　夫

１．はじめに

瑜伽行派（Yogācāra）は初期の経典『解深密経』(Saṃdhinirmocanasūtra)「分別瑜伽品」の中で菩薩の修するべきヨーガの体系を説いている。

本発表は、「分別瑜伽品」の説くヨーガには、言葉というものを捉え直そうと目論む大乗仏教の意向が強く働いているのではないかとの視点に立ち、言葉を巡る考えがどのようにヨーガに反映されているかを考察するものである。

２．大乗のヨーガの定義

「分別瑜伽品」は、ヨーガの一つである奢摩他（śamatha）と毘鉢舎那（vipaśyanā）が法仮安立(dharmaprajñaptivyavasthāna）と阿耨多羅三藐三菩提(anuttara samyaksaṃbodhi）への誓願を拠り所としていることに「大乗」の意味があると鮮明に打ち出している。

誓願とは仏になることであり、解脱し阿羅漢になることを目指すのではなく、解脱と共に智慧［菩提］(bodhi）を身に付けることを目標に据えるのであるが、法仮安立が大乗の指向するヨーガの拠り所になるとは、どのようなことなのか。

３．大乗のヨーガの源流

「分別瑜伽品」は、奢摩他と毘鉢舎那には四つの対象［所縁境事］(ālambanaṃ vastu）があると言及するが、これは野澤静證氏の研究[1)] により、『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi)「声聞地」(śrāvakabhūmi)（以下「声聞地」という。）で説かれたものを継承していることが知られている。

「声聞地」では、四つの対象の内、毘鉢舎那の対象となる有分別影像（savikalpaṃ pratibimbam）は、知られるべきことと同じもののイメージ[所知事同分影像](jñeyavastusabhāgaṃ pratibimbam）であって、これを観察することが毘鉢舎那の実践であると説く。知られるべきこととは、不浄や慈愍等であるが、最終的には四聖諦をヨーガの対象とする。換言すれば、不浄を観察するときのように、死体が腐り、変形し、蛆がわくという具体的且つ視覚的なイメージを展開する場合もあれば、四聖諦を観察するときのように、苦諦、集諦、滅諦、道諦の因果性を言葉や概念としてイメージ展開する場合もある。つまり、知られるべきことに多様性があり、視覚的なものから言葉や概念までをもその範疇に含んでいるのである。

一方、「分別瑜伽品」では、大乗のヨーガの拠り所である法仮安立が、契経、應頌等の所謂十二分教を三昧の領域である影像［三摩地所行影像］(samādhigocaraṃ pratibimbam）として観察すること、すなわち、毘鉢舎那の対象とすることへと転換されている。釈迦の直説である十二分教を通達し、文字または音声として記憶に留め、これをヨーガの対象として観察するのであるが、謂わば、心の中で言葉を操作し、イメージ展開を図るのであって、不浄観のように視覚的なイメージが入り込む余地はないのである。

「分別瑜伽品」の標榜する大乗のヨーガは、その源流を「声聞地」に遡ることはできるが、ヨーガの対象となる範疇に関しては、釈迦の言葉以外のものを認めず、釈迦の言葉にのみ正当性を与え、ヨーガ実践の起点に据えるのである。そこには、言葉にこだわり、言葉を捉え直そうと試行し続けた大乗仏教の一つの結論が反映されていると考えられる。ゆえに、大乗が言葉と正面から向かい合うためのきっかけを作った般若経に接することにより、法仮安立を十二分教と読み替えた「分別瑜伽品」の真意を読み取れるのではないだろうか。

４．言葉の解釈を巡って（１）

『八千頌般若経（Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)』によれば、我々は身の回りの事物や現象を仮の言葉で概念化（prajñapti）し、これを繰り返すことによって言語習慣（vyavahāra）を作り出しているのであるが、これらは言葉が生み出した虚構にすぎないのである。

一方、法（dharma）が言葉にすぎないことを自覚するならば、完全な智慧（prajñāpāramitā）を得ることが可能であると示唆している。完全な智慧とは、勝義

（paramārtha）のことであり、勝義とは、概念設定や言語習慣の存在しない領域のことである。

般若経は言葉の虚妄性を説き、言葉を超越した領域に菩薩の到達すべき究極の目標＝勝義があることを確信する。ところが、問題を孕むその言葉を批判するのに言葉を用いざるを得ない。般若経は言葉による認識の虚構を暴いたが、「言葉を用いて言葉を批判する」という自己矛盾に陥っており、その批判にも自ずから限度があると言えよう。

５．言葉の解釈を巡って（２）

般若経の言葉による認識の虚構という問題提起に対し、論理的に解を与えたのが龍樹である。龍樹は『中論』の中で、「二つの現実［二諦］（dve satya）に基づいて、諸仏の教えの説示がある。世間の約束としての現実［世俗諦］（lokasaṃvṛtisatya）と、究極の目的としての現実［勝義諦］（satyaṃ paramārthatas）とである。」[2] と述べ、菩提樹下で成道し仏陀となった釈迦は、勝義諦と世俗諦という二つの現実に足場を確保し、説法すると論じた。

また、世俗の象徴とも言える言葉の発せられる環境［言語習慣］（vyabahāra）なくして、釈迦は様々な法（四聖諦、十二縁起、五蘊等）を説くことはできないと言い切るのである。

言語習慣に基づく釈迦の言葉はあくまでも世俗の衆生に向けた仮の言葉（prajñapti）であって、菩提樹下で体験した現実は言葉では表現できない地平に開かれている。龍樹は、釈迦の言葉にはたとえそれが日常の言葉と同じであったとしても、勝義諦に立脚したものであることを根拠として、絶対の信用を与えているのである。「言葉を用いて言葉を批判する」という般若経の自己矛盾は、龍樹により「仏の言葉が世俗を批判する」ことで克服されたのである。釈迦の教え（法）は絶対者＝仏の言葉であり、これを纏めたものが十二分教である。ここに「分別瑜伽品」が法仮安立と十二分教を等値することの思想的原点が見出される。ただし、「分別瑜伽品」と『中論』を直接結び付けることはできない。何故なら、詳細は控えるが、般若経の説く空を理解する上で龍樹の考えと瑜伽行派のそれとの間に隔たりがあり、瑜伽行派は『中論』の主張を『瑜伽師地論』「菩薩地」で批判的に摂取し、『解深密経』へ継承してゆくという歴史的事実を考慮しなければならないからである。

６．大乗のヨーガの位置付け

大乗のヨーガの確立は、声聞乗に対する大乗側の抵抗運動の現れであると理解し得る。すなわち釈迦の言葉を聞き、これに従って不浄観や慈愍観を試み、解脱して阿羅漢を目指す声聞に対し、釈迦の言葉を頼りに心の中でイメージ展開を図り、言葉を超越した現実を体験することで、智慧をも身に付け仏となることを至上の目的とする大乗菩薩の決意表明であると位置付けることができる。

さて、「分別瑜伽品」は大乗のヨーガに一つのモデルを与えたと思われるが、「声聞地」のように具体的且つ視覚的なものをヨーガの対象とすることを放棄し、十二分教という抽象的なものを対象に据えたことで具体的なイメージを描き難くなり、観念的な操作を余儀なくされてゆく。果たして、瑜伽行派はヨーガの実践から徐々に遠ざかり、哲学的思考に耽るようになるが、その分岐点として「分別瑜伽品」が存在することになる。

註

１）野澤靜證『大乗佛教瑜伽行の研究』（法蔵館 ,1957 年 , pp.34-41）。

２）Louis de la Vallee Poussin, Madhyamakavṛttiḥ, Mūlamadhyamakakārikās（Mādhyamikasūtras）de Nāgārjuna, avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti, Bibliotheca Buddhica IV,（Reprint）Biblio Verlag, Osnabruck, 1970, p.492.

（大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻）